

[成果情報名] 「ゆら早生」のMS果生産のための摘果法

[要約] 小玉果となりやすい「ゆら早生」において、MS果中心の生産を行うためには、6～7月の果実肥大が良好な有葉果を有効に活用する。特に樹冠下部の直花果については肥大が劣り、生理落果率も高いため6月中に摘果を徹底する。

[キーワード] ウンシュウミカン、ゆら早生、摘果、有葉果、直花果

[担当機関名] 農林水産総合技術センター・果樹試験場・栽培部、環境部

[連絡先] 0737-52-4320

[部会名] 果樹

[分類] 普及

[背景・ねらい]

極早生ウンシュウミカン「ゆら早生」は品質が優れ市場での評価が高いことから和歌山県の推奨品種とされ、産地での導入が急速に進んでいる。品種特性として着花性・着果性が良好である反面、生産される果実はS級以下の小玉果の割合が高い。そこでMS果中心の生産を行うための摘果方法を検討するため、着果部位による果実肥大の違いを明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. 6月中旬までは有葉果より直花果が大きい、7月以降は上部・有葉果>下部・有葉果>上部・直花果>下部・直花果の順に推移する(図1)。
2. 期間肥大量は調査期間を通して有葉果が直花果より大きく、特に6～7月の差が大きい(図2)。
3. 収穫時の階級構成は樹冠上部・下部ともに有葉果ではMS果が中心であるが、直花果ではS・2S果が中心である(表1)。
4. 樹冠下部の直花果は生理落果率が高く(図3)、収穫時の階級構成は2S以下が多い(表1)。

[成果の活用面・留意点]

1. 樹冠下部の直花果は特に肥大が劣り、二次生理落果期の落果率も高いことから6月中に摘果を徹底する。
2. 6月に摘果を行う時には直花果より有葉果が小さいため、果実肥大量の大きな有葉果の摘果量を控える。
3. 上向きに着生している有葉果は、肥大が良好であり大玉果になりやすいが、日焼け果の発生も多いので摘果する。
4. 樹勢が低下し有葉果が少ない樹では全体的に果実肥大が緩慢であるため、土壌改良および灌水を実施して、樹勢維持・回復に努める。
5. 過度な乾燥は樹勢を低下させるとともに果実肥大を抑制するため、夏期の乾燥期には早めのかん水を行う。

[具体的データ]

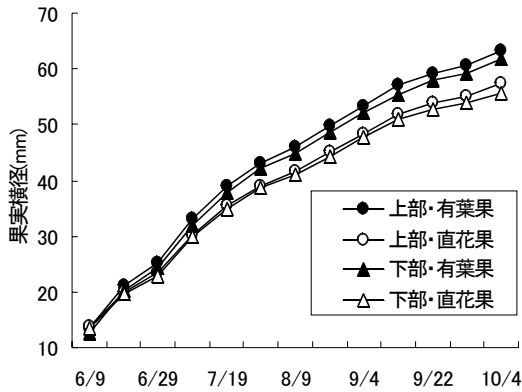


図 1 着果部位別の果実肥大の推移

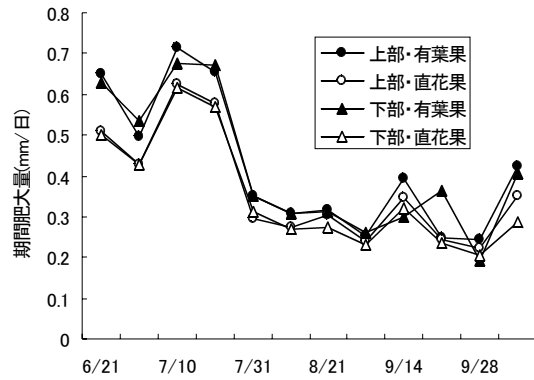


図 2 着果部位別の期間肥大量の推移

表 1 着果部位別の階級構成

		階級構成(%)					
		2L	L	M	S	2S	3S
上部	有葉果	1.1	15.6	55.6	27.8	0	0
	直花果	0	2.5	8.9	63.3	21.5	3.8
下部	有葉果	1.3	6.5	48.1	40.3	3.9	0
	直花果	0	0	4.5	56.1	37.9	1.5

※各部位100果の果実横径を調査

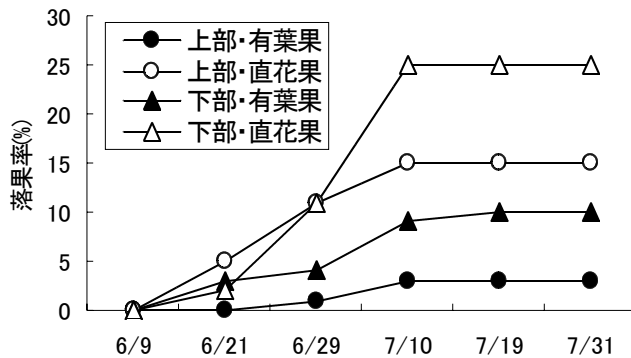


図 3 着果部位別の落果率の推移

[その他]

研究課題名：和歌山ブランドみかん生産技術の確立
 予算区分：県単 研究期間：平成16～19年度
 研究担当者：中谷章、鯨幸和、植田栄仁、宮本久美
 発表論文等：なし